

山と博物館

第39巻 第5号 1994年5月25日

大町山岳博物館



雨に煙るコブシ 写真と文 山本 携挙

霧雨が降る中、春の花を撮りにかけた。大町界隈は、梅も桜もそれに水芭蕉やカタクリまでも、開花時期にあまりずれが無く、一斉に始まるから忙しい。百花繚乱とはこのことか、今年は特にその感じが強かった。

山際に雨に煙るコブシを見つけシャッターを切る。コブシは漢字で辛夷と書くと、いかめしい感じだが、花はいたって優しい。樹は大きく、白い花を穂のようにたくさんつけて平地に育つ。例年高瀬溪谷入りの北向き斜面を白く彩るのはタムシバと違って、コブシとは分けられている。

「コブシの花のいい年は米が不作……」とか、そういえば昨年は花が多かった。今年は花の方が不作だから米はいいだろう。

花の撮影で、陽の光に映えるときは眼にきれいだ、花卉に照り（反射）が強くて、写真にするとな案外がっかりする。むしろ日は曇るか早朝の淡い光の中がいいと思う。その方がアップで撮れば質感が出るし、ロングに引いても、花が周囲の風景に溶け込んだ色合に写ってくれる。

（山岳博物館協議会委員）

雨飾山の植物

池上睦美



雨飾山

雨飾山(一九六三・三三)は、小谷村と糸魚川市との境にあって、上信越高原国立公園の西端を占める。いわゆる頸城山脈の盟峰であり、山頂は双耳峰からなる独立峰である。雨飾山は全体が急峻な地形であるが、東と西北および南には尾根が伸び、急峻で人も近づけない南尾根のほかは、登山道が開けている。雨飾山山体およびその周囲は新生代第三紀層が分布する。主として黒沢砂岩・前沢泥岩・砂岩層や礫岩からなる地層を基盤とし、角閃石安山岩・珉岩で構成されている。また雨飾

山の幾つかの大岩壁は柱状節理の発達がよく見事である。気候的には、日本海側気候をまともに受けているため、特に冬期の降雪量は多く、日本屈指の豪雪地帯である。同じ山でも、山頂の西側は季節風の風上に当たり、東側と東に伸びる尾根の南側は風下になるために積雪に大きな違いが見られる。したがって、植生・植物相にも影響を与えている。

雨飾山の標高八〇〇mから一五〇〇mまでは、ブナが優占する原生林で見事である。この原生林にはブナのほかに、トチノキ・ホウノキ・ハリノキ・ウダイカンバ・アカイタヤ・オヒヨウ・ミズメなどの高木や、オオカメノキ・ナナカマド・カエデ類・ヒロハツリバナ・タムシバ・ミヤマガマズミなどの小高木や低木がわずかに混生している。また日本海側要素といわれるユキツバキ・オオバクロモジ・マルバマンサク・ヒメモチ・エゾノユズリハも生え、ブナ林と密接に結びついている。林床にはチシマザサが群生していることから、日本海型気候の影響を受けて、日本海側に分布するチシマザサ・ブナ群団の領域である。草本ではユキザサ・ミドリユキザサ・ツバメオモト・オオバタケシマラン・タケシマラン・コケイラン・キンラン・シヨウキラン・テンニンソウ・オクモミジハグマ・シラネアオイ・オオイワカガミ・ツルアリドウシ・タニギキョウ・ホウチャクソウ・シヨウジョウバカマ・サンカヨウ・エンレイソウ・ツクバ

ネソウ・ズダヤクシユ・オオヤマサギソウなどである。亜高山帯は標高一五〇〇mから二四〇〇mにあたる地域で、気候帯からみれば亜寒帯に属している。植物帯では常緑針葉樹林帯と呼ばれる領域で、シラビソ・オオシラビソが優占することからシラビソ帯とも呼ばれている。しかし、日本海側で多雪地帯の鳥海山をはじめ出羽山地や上越山地の山々と同じように、雨飾山も亜高山帯なら普通に見られる常緑針葉樹林が存在しないという、植生上特異な性格を持っているのが特徴である。だが針葉樹が全く生育していないということではない。急傾斜地でも、尾根とか岩石上の草地やチシマザサなどの中にコマツガやオオシラビソが生えているが、その数は少なく針葉樹林までには発達していない。雨飾山ではブナを主とした原生林は標高約一五〇〇m止まりで、それからはブナは低木状となり、ミネカエデ・ヤハズハンノキ・タカネミズキ・アカミノイヌツゲ・タニウツギ・ムラサキヤシオ・ミヤマハンノキ・コヨウラクツツジ・カラスシキミなどの低木や、ミズナラの

変種で矮性のミヤマナラなどが混生している。その中に針葉樹のキタゴヨウがわずかに生えている。標高約一七〇〇mから上は、登山道の大綱コースと、小谷温泉コースとでは、植生・植物相に違いが見られる。

大綱コースでは、チシマザサの混じった低木林を過ぎると、岩礫地・岩石地・岩壁・崩壊地からなる急傾斜地が頂上まで続いている。急傾斜面



テガタテドリ

で岩壁が露出して下へ続いている所や、前沢上流の崩壊地では、植物はあまり生育していない。取り残された急傾斜地の尾根や岩石上の草地には、風に強く強固な根をはり、丈夫な幹と枝をもったコマツガがわずかに生えている。連続した尾根では直立した幹と枝をもった針葉樹は、強風や雪崩などの作用で倒れ倒れしてしまう。その代わりに幹の曲がりくねった状態でも生育できるタケカンバが多数みられる。登山道付近の砂礫地には、ヨツバシオガマ・テガタテドリ・ハクサンチドリ・ミネウスユキソウ・ギョウジャニンニクなどの高山植物やアツモリソウなどが花を咲かせている。岩礫地や岩石地の草原にはコケ類やイネ科の植物が繁茂している。その中にイワシモツケ・アイズシモツケ・オオコマツツジ・ハクサンシヤクナゲ・ミネヤナギ・ミヤマハンノキ・ウラジロヨウラクなどの低木が、岩石上を這うようにして生えている。草本では乾いた所を好むイワベンケイやミヤママンネングサ・ミヤマハンシヨウツル・ウラジロキンバイ・イブキジャコウソウ・タカネコウ



ニヨホウチドリ

リンカなど高山植物が美しい花を咲かせている。この斜面も七月下旬〜八月月上旬には、シモツケソウ・オオカサモチ・オオハナウド・タムラソウ・ミヤマシシウドなどの背丈の高い草が混生する広葉草原となる。尾根道で岩石からなるピークがあり、西側は最も急峻な岩壁で、柱状節理の様子がよく観察できるが植物はあまりみられない。尾根道付近には、ミヤマクワガタ・ミヤマダイコンソウ・ミヤマハンシヨウヅル・カモメラン・ハクサンチドリ・ニヨホウチドリや岩壁の棚にはシロウマオオギが生えている。頂上手前の岩礫上の草地には、ハイマツやキタゴヨウが岩礫上を這うようにして風下に伸びている。そのほかミヤマホツツジ・コヨウラクツツジ・ミヤマハンノキ・ミネヤナギなどの低木があり、草本ではミヤマウイキョウ・ミヤマラッキョ

ウ・ミヤマムラサキ・ゴゼンタチバナ・ヒメシヤジン・タカネナデシコ・タカネコウゾリなどの高山植物が生えている。ハイマツの下にコケモモやタカネバラも生えている。イネ科ではミヤマヌカボ・コメガヤが多い。岩石の間にはイワヒバやイワフデなどシダ植物もみられる。これも七月下旬には、ミヤマシシウド・ミヤマセンキユウなどの高茎草原となる。頂上西側斜面の岩礫地にはイネ科の植物の中にニヨホウチドリ・ミヤママンネングサ・シコタンソウ・タカネコウリンカ・ヒメシヤジン・タカネナデシコなどの高山植物が花を咲かせている。また急斜面の尾根には、コメツガが季節風の影響を強く受けて風下側に枝をなびかせられている。このコースでは風あたりの強いことから、あたかも高山帯の様相を呈していること、チシマザサや低木林がほとんどみられないことが特徴である。小谷温泉コースでは、荒普沢を渡りブナを主にウリハダカエデ・ミズキ・ナナカマド・オオカメノキなどが混生する小高木林の急な坂道を登り終わると、チシマザサの繁茂する中に背丈の低いアカミノイヌツゲ・タニウツギ・ミネカエデ・ミヤマナラ・ツクバネウツギ・ミヤマハンノキなどが混生し、明るく展望が開ける。急斜面の岩壁の間の尾根や沢筋には、ダケカンバ・コメツガ・オオシラビソ・ミヤマハンノキの小高木や低木が混生している場所が幾つかみられる。一七〇〇mの地点で登山道付近の岩場には、イワオトギリ・イブキジャコウソウ・オニアザミ・クサボタン・オオバギボウシ・ヨツバシオガマ・ホソバコオニユリ・ミヤマクマバナ・シラネアオイ・オオバキスミレ・ハクサンチドリなどが美しい花を咲かせている。急斜面を登

りきるとササ平と呼ばれる所に出る。この辺のチシマザサの背丈は低く、その中にナナカマド・オオコメツツジが点在している。標高約一八九〇mの所にはミヤマナラがありチシマザサ・ミヤマナラ群落を形成している。登山道の縁には矮性低木のアカモノ・コケモモ・シラタマノキやミヤマコウゾリナ・ミヤマコゴメグサ・ゴゼンタチバナなどの草本、チシマザサの中にはハクサンシヤジン・ハクサンフウロウ・オオカサモチなどが生えている。ここから頂上下(約一九〇〇m)までは、多少の上り下りのある尾根道が続き、両側にはチシマザサが繁茂している。その中に背丈の低いオオシラビソが点々と生えていたり、ベニバナイチゴ・ミヤマハンノキ・ナナカマド・ウラジロウラクなどが混生した所がある。尾根道の中間には砂礫地があり、北側のチシマザサの背丈は一段と低く、七月下旬



ホソバコオニユリ

から八月月上旬にはシモツケ・マルバダケブキ・タテヤマウツボグサ・タカネナデシコ・ミヨウコウトリカブトなどの花が一面に咲き見事である。また、南側には池漕があり、その周囲にはチングルマ・ミツバオオレン・シヨウジョウスケ、やや離れてキヌガサソウ・オオレイジンソウ・モミジカラマツなどが生えている。頂上までの急斜面には、チシマザサの中にオオカラコウ・マルバダケブキ・オオハナウド・クマガイソウなどの大型の植物が、登山道付近にはミヤマタンポポ・シロバナヘビイチゴ・ヒメシヤジン・ヤマガラシ・ハクサンオミナエシ・イワツメクサ・ユキワリソウ・カモメラン・テガタチドリ・タテヤマウツボグサ・ミネウスユキソウ・オヤマソバ・オヤマリンドウなどが花を咲かせている。小さな崩壊地の横にはミネカエデ・ミヤマハンノキ・ナナカマド・コヨウラクツツジ・ハイマツ・コメツガ・ハクサンシヤクナゲなどの混生した低木林があり、頂上南側はチシマザサで覆われている。

雨飾山の植物の多くは、六月頃から九月上旬頃までが活動の期間である。なかでも七月下旬から八月月上旬は最も活動の盛んな時期で、山地帯・亜高山帯・高山帯を住みかとする植物が、頂上付近や東や西北に伸びる尾根を、赤・紫など色とりどりの花で包み見事である。また、晴れた日には西に鹿島槍・五竜岳・唐松岳・白馬三山など北アルプス北部の雄大な山岳景観が眼前に広がる。北には根知の谷から糸魚川市・日本海をみる事ができる。東には金山・天狗原山が、南には戸隠連峰を望むことができる。機会があれば、雨飾山に登り景観を楽しむのもよいと思う。

(長野県植物研究会会員)

歌人 百瀬慎太郎

東 ひがし
栄 えい
蔵 ぞう

百瀬慎太郎

いままお多くの人びとに愛誦され続けている百瀬慎太郎のことは「山を想へば人恋し」人恋へば山恋し」は、慎太郎だけが言いえた表白。慎太郎の生涯を貫いているその精神を凝縮して表徴した魅力的なことばである。

——このことばは、死去する前年の昭和二十三年五十六歳のときの随想「針ノ木峠雑談」のなかで、針ノ木峠のさまざまな出来事を回想しながらつぶやくように述べたもの。「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し。童謡ならぬ老謡を口吟みながら、我ながらいつまでも抜けきらない老センチメンタリストを自分に発見するのである。山と人、その交錯の相をちつと見せつけられて来た自分である。」

これは、青春期の文学との出会い山との出会いが交織し、さらにさまざまな人びととの出会いのなかで醸成され、その生涯に伏流し続けてきたロマンティズムである。

慎太郎は大町小学校四年生のころ、時事新報社から新しく発刊された雑誌「少年」に清

新たな感銘を受ける。そして同級生の内山重助と雑誌を通して親しくなり、美しい友情の嫩芽を培っていく。旧制大町中学校三年生のころ、同人誌「仁科」を主宰した内山から、ツルゲーネフの「父と子」などロシアの翻訳小説をすすめられ、夢中で読み続ける。その親友内山が、ある初夏に慎太郎に遺書を残して突然「文学青年的死を自ら選んで」しまった。慎太郎が明治四十五年に詠んだ追悼歌。

今は我が思う人なし浅黄なる煙の中に誰し画かん

それから二十六年経った昭和二十二年に慎太郎は随想「憶ひ出断片」のなかで、「新緑の時にになると、何時も君を憶ひ出しては」「今なお私を涙くませる」と述べている。

明治四十二年夏、若き辻村伊助が対山館を訪れる。慎太郎に山への思慕を導いてくれた最初の人であるとともに、島崎藤村の「破戒」など自然主義文学の世界に導いてくれた人。ついで慎太郎が大町中学校を卒業した明治四十四年十九歳のとき、若山牧水が対山館に宿泊。慎太郎はかねてあこがれていた歌人牧水と出会い、その門下となり作歌を始める。肌寒き四月信濃の山風に吹かれて去りし君のしのばゆ（牧水へ）

明治四十四年十九歳から大正三十二年二十二歳までに詠んだ慎太郎の短歌は百六十三首。石楠の花咲く頃となりけり音無く雨の降る快よさ

夢の如し君来給ひぬ漂然とまた去り行きぬ
山匂ふ頃
黄に枯れし麦の穂尖のゆるる度危ふく心乱
れんとする
歌ひ出づる女の声のさびたるも実に文月の
雨のうれひか
こぼれたる古き屋敷の土壁に注ぐ夕陽の赤
きかなし
枯草をききて寝れば杣の実の赤きが痛く目
にしみわたる

これらの短歌からは、青春の清冽な感傷が大町の風物と溶け合って響いてくる。そして次のような抒情へと深まっていく。憂鬱の心静かに燃えてけり夜空に白く山脈は走りおり
人恋ふる寂しさが誘ふ旅心山路の雨に濡れつつ吾が行く

夏草のしげみに熟れし木苺を喰みつつ歩む霧の山みち
遺稿集「山を想へば」に収められている慎太郎の短歌はおよそ六百七十首。その大部分は二十歳代の大正前期と敗戦前後の五十歳代の晩年期に集中している。三十歳代四十歳代は、対山館主として在野の山案内人として、日本初の登山案内組合を創つたり北アルプスの登山ルートを開拓したり、さらに針ノ木の麓の大沢に大沢小屋を、ついで針ノ木峠小屋を建てることに奔走している。この間の作歌は少ないが、対山館に泊つた有島武郎・斎藤茂吉・竹久夢二・長谷川如是閑など多くの著名な作家・歌人・画家・学者と交流している。

大正期から昭和初期の対山館はまさに異色の文化サロンでもあった。そしてサロンの主慎太郎はこれらの人びとに親炙し、慎太郎はまたこれらの人びとに親愛された。親愛され

たのは、岳人慎太郎の心にひそむ文学的感性のゆえであった。そして慎太郎もまたこれら個性豊かな人びととの交流のなかでみずから文学的感性を深めている。

太平洋戦争が激しくなった昭和十八年に対山館は廃業する。その前年の昭和十七年五十七歳から亡くなる同二十四年五十七歳までに、慎太郎は四百七十首の短歌を作っている。三十歳代・四十歳代に蓄積されていたものが、一挙に湧出したといえる。

遠雲をながめてあればま近くを影をおとし
て走る雲あり
秋海棠咲くくべくなりぬ底知らぬ寂しさに聴く秋雨の音（敗戦）
古里のうからを山を恋ひにけむ戦ひのまの
汝が心あはれ
うつつ世のあらがひの姿見るに堪へず我が
心ひたに山によりゆく

大沢の小屋の窓辺ゆげ嶺の秋ばむ色を見つつ幾日ぞ
いくそたびわが登りけむ山々の姿を見れば
ながめあかぬかも
これらの短歌から、「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し」に表徴される慎太郎の精神が、異常な時代状況のなかで、静かに自在に運命に対峙している様が、いみじくも伝わってくる。（長野県国語国文学会会長）

山と博物館 第39巻 第5号

発行所 千壽長野県大町市 TEL 〇二一
印刷所 大町 山岳博物館
印刷所 長野県大町市
定 価 年額 一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番 〇五四〇一七三三三